植民地後期ケドゥーにおけるヨーロッパ市場向け煙草栽培に関する覚書

植　村　泰　夫

【キーワード】植民地後期・ケドゥー・ヨーロッパ市場向け煙草・民間企業

はじめに

植民地後期インドネシアのヨーロッパ市場向け主要輸出品の１つだった煙草は、16世紀末にポルトガル人の手で群島に持ち込まれ、早くも17世紀初にはジャワ各地で栽培が行われたが、当初は専ら内地市場向けで、その中心は18世紀以来オランダ植民地期を通じて一貫して中ジャワ山間部ケドゥー地方[1] だった。ヨーロッパ市場向け栽培が始まるのは、1830年にジャワに強制栽培制度が導入されてからだった。これ以降、ジャワのブスキ、王侯領、東スマトラなどがその中心地となり、これらの地域では煙草は専らヨーロッパ市場向けに栽培された[2]。これに対して小論で取り上げるケドゥーの場合には、別稿で検討するようにそれ以降もあくまで内地市場向け栽培が中心であり、以下で明らかにするように輸出向け栽培はいわば付随的に行われた。そのことが、この地域の輸出向け栽培にどのような特色を帯びさせたかが、小論が検討する課題である。

以下、先ず強制栽培制度下の輸出向け煙草栽培のありようを概観する。次いで19世紀後半に始まるケドゥー地方の民間企業による自由栽培の推移を追い、最後にその栽培の特色を述べたい。

Ⅰ．強制栽培制度とケドゥーの煙草栽培

１．煙草の強制栽培制度の推移

植民地政庁は強制栽培制度実施に際し煙草もその対象に含めたが、そのために選ばれた品種は従来から栽培されてきたジャワ煙草ではなく外国種煙草だった。1830年末、政庁はマニラからマニラ煙草種子とその栽培解説書を密かに手に入れ、翌年、それをパスルアンとクラワンで試験的に栽培させた。この栽培は好成績を収めたので、総督は栽培長官にその継続と、ハバナ種、マニラ種20万ポンドの栽培を命じた[3]。そして33年１月、栽培長官は回状を理事向けに発し、理事州毎に決められた面積に栽培を行うよう指示し、必要な乾燥小屋を建設させる権限を理事に与えた。この年にはクラワン、パスルアン、スマラン、バゲレン、レンバン、ケドゥー（ジェティス県Paraán)[4]、バニュワンギの各理事州で栽培が試行された。しかし、ケドゥーでの栽培は完全に失敗だった［Deventer 1866:394〜396］。

栽培試行は34年にはクラワン（25バウ)、ケドゥー（150バウ)、ブスキ（15バウ)、レンバン（10バウ)、あわせて200バウで実施された。政庁はこの年、ボーフト（N.G. de Voogt）をキューバ

へ煙草栽培研究のため派遣している［Blink 1912:315〜316］。35年にも同様にクラワン（62バウ）、ケドゥー（50バウ）、ブスキ（15バウ）、レンバン（10バウ）、合計137バウで試行され、またケドゥーでジャワ煙草50,000ポンドをオランダ向けに加工することも決められた［Deventer 1866:739〜740］。

翌36年には早くもクラワンとブスキの栽培は中止になったが、これ以降ケドゥーとレンバンでは栽培が拡大され、37年には新たにバニュマス（ただし40年には廃止）、40年にはパスルアンに導入されるなど、ジャワの栽培面積は増えていった。もっともケドゥーでは、37年から栽培が200バウに増やされたが、42年収穫を最後にこの制度は廃止された。ここでは農民の自由な乾季作煙草栽培が政庁栽培の倍の収入をもたらすと推計されたことが、早期廃止の原因だった［Elson 1994:79〜81］。しかし、その後もレンバンでそれまでの拡大がさらに進んで1844〜47年にはこの理事州の栽培が2,000バウを越えたこと、44年にバンテン（〜47年）、チェリボン（〜45年）、テガル（〜47年）、スマラン（〜63年）、スラバヤ（〜63年）で新たに実施されたことなどから、ジャワ全体の栽培面積は増加し続けて46年にピークの4,111バウを記録、翌47年にも3,970バウとほぼ水準を維持した。

栽培縮小が始まるのは48年からである。この年の合計面積は1,400バウ余りと激減し、51年には1,830バウまで回復するが以後増加することはなく、1865年にジャパラ、レンバンの合計127バウの収穫を最後に廃止された［C.E.I., vol.14: table B9］。

２．煙草強制栽培制度の実際

この制度下では煙草は一般に水田乾季作として作られ、収穫まで８〜９ヶ月を要したが、栽培を割り当てられた農家の労働負担は極めて重かった。Elson［1994:79］によると、水田は稲収穫後７回耕起され、排水路造成後、苗が移植される。生育初期には日覆いをして太陽の熱射から保護することや、近くの河や水路から水桶で水を運んで灌水することなど、特に手がかかる。また生育期間を通して耕作、除草、根元から出てくる余分な吸枝の除去、害虫駆除などが行われた。収穫された煙草は棒や格子垣に吊して乾燥小屋へ運ばれた。しかも、これらの作業は「農民が自分の水田と、裏作物栽培に使おうとする耕地を耕し植え付けるのに忙しい、まさにその時期になされねばならない（AJV Japara 1850）」［Elson 1994:113］のだった。

畑から乾燥小屋までの運搬は、距離が1.5パール以上だと「各１パールにつき50カティ（＝約30kg）からなる荷１個当たり2.5セント」が払われたが、「栽培はあらゆる方法により、倉庫と関係デサになるだけ近い場所」で行われた［K.V.1861:151］ので、農民はかえって栽培のために遠く（時には15km 以上）まで出かけねばならないこともあった［Elson 1994:79〜81］。逆にレンバンでは常に支払いがなされたが［K.V.1858:103］、多数の倉庫が耕地から離れすぎており、栽培者が煙草を耕地から搬入するのは負担が重く反感が強まっているので、「契約者は政庁の勧

めに応じ倉庫をデサにもっと近い所に移したり、雑木で新しい倉庫を建設した」［K.V.1856：110］という。

以上の栽培労働には賃金が払われたが、それは全く不十分で農家が納入すべき地税を下回る場合が多かった［Elson 1994：79〜81］[5]。これに加えて1840年代前半にレンバン、スマラン、チェリボンで栽培が拡大し政庁と契約した煙草企業が８から37に増加（レンバンのみで18）した［Fasseur 1975：44］結果、道路建設、煙草加工用の巨大な小屋の建設に大量の労働力が動員された。また煙草畑では毎年、米作のために水路を造り直す必要があった［Elson 1994:79〜81］。さらに煙草栽培は土地を消耗させ、その後に作られる米その他の収量を減退させた［Elson 1994：230］。

このような賃金に見合わない重い労働負担の結果、不満を持った住民はしばしば逃亡した。例えばホエフェルは旅行中に、レンバンで「ジャワ人はこの栽培に強い反感を抱いており、他理事州への住民移動が続いている」［Höevel 1849, dl.1:132］ことを観察している。またチェリボンでは住民が煙草小屋建設用木材伐採の労役を逃れるため大挙して逃亡し、ある郡ではそれは住民26,000人中の11,000人に及んだ。この結果米田は放置され、46年初には事態は放置できないほど深刻になったので、政庁は企業との契約を一方的に破棄しこの制度を廃止した［Fasseur 1975：53］。

また政庁と契約した企業にも様々な問題があった。例えばレンバンではいくつかの企業の貯蔵スペースは豊作の場合には小さすぎ、葉を生乾き状態で圧縮せねばならなかった［K.V.1852：109］。加えて企業家の大半は煙草に関する十分な専門的知識を持っていなかったため［Elson 1994：133］、市場に出る煙草の質は悪く価格が低下した。特に47年には事態が深刻化し、煙草の販売は不振で、時には原価以下で売らねばならなかった［Fasseur 1975：60］。この結果、企業の中には政庁から16,000〜100,000ギルダーの無利子融資を10年間で返済する条件で受けている者があったが［Bleeker 1850：6〜7］、返済不能になり、レンバンでは「政庁とのヨーロッパ人契約者は、国庫に驚くような負債を負っており、煙草価格が安いのでそれは年々悪化している」［Hoëvel 1849, dl.1:132］といった事態が発生した。要するに、煙草企業は赤字を抱え、それが植民地政庁の財政負担増加の原因となっていたのだった[6]。

こうした事態に直面した政庁は、1848年に救済措置として従来の契約に加え補充契約を結び企業に必要な前貸しを供与し、生産物を全て政庁に供出することを認め、それを見積価格で買い上げてオランダ商事会社の仲介で販売することにした。同時に、栽培面積も縮小させた［K.V.1849：218〜219］。この方針はその後も続けられたが［K.V.1850：76〜78］、現実には効果が薄かったようだ。1851年、政庁の命令で煙草を栽培するのは14企業だけで３企業は倒産し、残りの契約は解除された。この年の栽培は1,830バウで45年の半分、参加家族数は11,000、45年の1/3にすぎなかった［Fasseur 1975：60］。その後も、政庁との契約面積全部を栽培できない企業がかなりに上った。

すなわち1858年にはレンバンの９企業中の５企業（契約面積1,000バウ、実際の栽培705バウ）、スラバヤの１企業（200バウ、75バウ）［K.V.1858：103］、61年レンバンの４企業（750バウ、555バウ）、スラバヤの１企業（200バウ、125バウ）［K.V.1861：151］、62年レンバンの４企業（750バウ、530バウ）、スラバヤの１企業（200バウ、125バウ）［K.V.1862：179～180］、63年レンバンの１企業（200バウ、175バウ）、スラバヤの１企業（200バウ、175バウ）［K.V.1863：174］が、報告されている。

こうして1860年、現行の煙草栽培契約は終了時に更新しないことが決められ、先に見たようにこの制度は65年収穫を最後に廃止された。この最終的判断の背景には、1857年の記事に「レンバン理事州では、政庁と契約が結ばれた煙草栽培が1,253バウある。同じ理事州には、この政庁栽培の他に、行政の仲介なしにヨーロッパ人企業家と原住民の間で自由意志で協定された1,057バウの栽培がある。こうした状況は、同理事州で煙草契約を延長すべきか否かの検討に際して、自由意志の煙草栽培がレンバンでますます拡大するだろうという事実を考慮すれば、強制労働により行われる協定の延長は薦められないという結論に至らせた。だから東インド政庁は、そうした延長をしないことに踏み切ったのだ（Staatscourant 4 April）」［Tabakskultuur 1857：339］と述べられるように、強制栽培と平行して行われていた企業による「自由栽培」の拡大があった。これ以降、ヨーロッパ市場向け煙草栽培は、民間企業の自由栽培によって担われることになる。

Ⅱ．民間企業による輸出向け煙草生産の推移

１．ケドゥーにおける初期の発展

旧ケドゥー（トゥマングン県、マゲラン県）における民間資本による輸出向け煙草企業に関するK.V.記事の初出は1860年のことで、「ケドゥーではスマランにある商社が、住民や村落首長との口頭による協定によって栽培を実施させ、生産物の貯蔵・加工施設を建設する権利を認められた」［K.V.1860：129］とあるから、この栽培は1860年から始まったと考えられる[7)]。これ以降、1874年までの状況は、表１に示される。生産高は天候条件に左右され増減が激しいが、企業数や倉庫数の増加、さらに74年にはそれまで輸出向け煙草栽培がなかった旧バゲレン（ウォノソボ県）でも企業が新設される等の点から考えて、ケドゥーではこの時期、とりわけ70年代に入ってこの産業が発展したといえよう。

こうした傾向は、ジャワ全体に共通するものだった。例えばレンバンでは1871年、「ヨーロッパにおける煙草価格上昇の結果、本年には若干の既にいったん放棄された煙草企業が操業を再開し」［K.V.1872：149］、プロボリンゴでは72年に「この理事州の煙草栽培は全てがルマジャン郡で行われ、同地域の住民の主な収入源である。1872年の栽培は3,300バウだと報告される。この２年間なおヨーロッパ市場で続いているジャワ産煙草の異常な高値は、1872年に加工小屋数が大拡大する刺激となった。だから1871年の６企業に対して、10企業が操業している。1871年産高は

表１　ケドゥーにおける民間企業のヨーロッパ市場向け煙草栽培（1860〜74年）

年	企業数（企業名または所在地）	生産高（ピコル）	栽培面積（バウ）等	出所
1860	2	不明		K.V.1861 :153
1861	2（① Magelang 県 Poerbolinggo 郡、② Temanggoeng 県 Djetis 郡）	①416、②64	栽培面積：①不明、②35 ①②は同一経営	K.V.1861 :bijl.AA
1862	2（同上、施設は①が Djoemoijo、Djettak、Sroemboong、②は Djragan、Temanggoeng に所在）	合計1,400	栽培面積不明 ①②は同一経営	K.V.1862 :bijl.Z
1863	2（① Poerbolinggo 県 Poerbolinggo 郡、② Djetis 県 Djetis 郡）	合計488	栽培面積：①100、②不明 ①②は同一経営	K.V.1863 :bijl.Y
1864	2（① Magelang 県 Probolingo、Romaneh 郡、施設は Djoemoijo、Djettak、Sroemboong、② Temanggoeng ＝ Temanggoeng 県 Djetis 郡に所在）	①1,200、②400	栽培面積：①250、②不明 ①②は同一経営②は５倉庫	K.V.1864 :bijl.X
1865	4（① Djoemoijo、② Sroemboeng、③ Djetak、④ Temanggoeng）	①920、②520、③800、④680	栽培面積：①145、②85、③100、④85、①〜④同一経営	K.V.1865 :bijl.Z
1866	4（① Djoemoijo、② Sroemboeng、③ Djetak、④ Temanggoeng）	①1,093、②667、③1,000、④880	栽培面積：①230、②175、③150、④170、①〜④同一経営、30倉庫	K.V.1866 :bijl.C
1867	4（① Temanggoeng、② Djetak、③ Djoemoijo、④ Sroemboong）	合計2,384	30倉庫	K.V.1869 :116
1868	4（① Temanggoeng、② Djetak、③ Djoemoijo、④ Sroemboong）	合計4,560		K.V.1869 :116
1869	5（① Temanggoeng、② Djetak、③ Djoemoijo、④ Sroemboong、⑤ Sawangan）	②〜⑤計6,000	①5倉庫、②③④計27倉庫、⑤７倉庫、②③④で200万本買い上げ	K.V.1870 :114
1870	5（① Temanggoeng、② Djetak、③ Djoemoijo、④ Sroemboong、⑤ Sawangan）	①〜④計1,680、⑤855.5	栽培1300バウ、①〜④は Java tabak-mij が経営、35倉庫、⑤は８倉庫	K.V.1871 :160〜161
1871	7（① Temanggoeng、② Djetak、③ Djoemoijo、④ Sroemboong、⑤ Sawangan、⑥ Kadoe、⑦ Wonosari）	①〜⑥計 ±7,130	①〜⑦で栽培2250バウ、計55倉庫	K.V.1872 :150
1872	5（① Temanggoeng、② Djetak、③ Djoemoijo、④ Sawangan、⑤ Wonosari）		Temanggoeng が Kedoe 吸収、計62倉庫	K.V.1873 :204
1873	8（①〜⑤＋ Magelang、Paraan、Wonosrojo 立地３新設企業）	計21,600		K.V.1874 :184
1874	10（旧 Kedoe）＋2（旧 Bagelen で最初の企業新設）	7,708 （旧 Kedoe のみ）		K.V.1875 :185

9,900ピコルだが、1872年は低めに見積もっても約20,000ピコルである。」［K.V.1873:204］、74年には「この地方の煙草に近年ヨーロッパ市場でつく異常な高値の結果、買い上げ者間に激しい競争が生じ、これにより広範な住民に多くの富が流入した。1873年には新企業が設立され、既存の企業は規模を拡大した。」［K.V.1874:183］と報告される。

このように、これらの報告は発展の背景に煙草の高値があったことを示唆している。実際、表２からアムステルダム市場における代表的なインドネシア産煙草の価格推移を見ると、1870年代前半には急騰している。

表２　アムステルダム市場におけるインドネシア産煙草価格の推移（ギルダー /100kg）

	1860～64年平均	1865～69年平均	1870～74年平均	1875～79年平均	1880～84年平均	1885～89年平均	1890～94年平均	1895～99年平均	1900～05年平均	1905～09年平均
ブスキ煙草	112.4	94.4	235.0	156.3	95.7	91.7	72.1	75.8	62.9	67.4
王侯領煙草		89.9	157.8	124.2	102.4	88.4	109.9	91.6	74.7	98.4
スマトラ煙草		245.6	291.6	276.4	257.2	276.4	221.2	198.8	192.5	238.4

	1910～14年平均	1915～19年平均	1920～24年平均	1925～29年平均	1930～34年平均	1935～38年平均
ブスキ煙草	68.0	134.0*	77.7	77.9	48.0	43.4
王侯領煙草	82.9	209.5*	122.5	114.9	67.7	73.1
スマトラ煙草	251.6	378.4	490.0	373.0	245.6	262.8

表註：* は1915年のみの数値
出所：C.E.I. vol.15, table 2A より作成

２．1877年以降の衰退

しかし、表示のように市場価格はそれ以降、1900年代前半まで下落傾向にある。それゆえ、ケドゥーにおける70年代前半の発展も長続きしなかった。75年以降の状況は表３に示されるが、75年がピークで旧ケドゥーで12企業が操業し、倉庫数は200を越えた［K.V.1876:189］。旧バゲレンでは企業が３軒になった。ところが77年には旧ケドゥーでは Djoemoijo と Djetak、Soetjen、Temanggoeng が操業停止し、78年にも恒久的閉鎖や一時閉鎖、企業合併が行われ、81年には Djetak、Semeen の２企業が新設されたものの、82年には全企業が閉鎖される。そして87年、88年に新設された Goelon と Ngrowoseneng も短命で、ヨーロッパ市場向け煙草生産の本格的再開は後述のように1909年のことだった。またバゲレンでは82年に Maron が閉鎖されて以降、企業の新設はなかった。

こうした動向は、ジャワ全体で輸出向け栽培が特定の地域に収束していくプロセスの一部だった。表４から明らかなように、ピーク時の1870年代後半にはほぼ全理事州に農園があったが、1905年には３理事州にすぎなくなる。それまで各地に散在していた農園が次第に淘汰され、栽培適地への集中が生じたと思われる。ケドゥーも、パスルアンやブスキほどには輸出向け栽培に適した地域ではなかったようだ。

しかし、このことはケドゥーの煙草栽培自体の衰退を意味するものではなかった。表５に示されるように、この時期には明らかに栽培が拡大している。そして増産された煙草は、ヨーロッパ市場向け輸出が減少したこの時期には、専ら内地市場向けに加工されたと考えられる[8)]。

表４から読みとれるいま１つの特徴は、それまでに農園が消滅してしまった地域の中で20世紀に入ってそれが復活したところが若干見られることである。ケドゥーもその１つであるが、それは如何なる状況によるものであっただろうか。

表３Ａ　ケドゥー理事州煙草企業生産量等一覧（kg, 1875〜1920年）

県	企業名	経営者名	1875年	1876年	1877年	1878年	1879年	1880年	1881年	1882年	1887年	1888年	1889年	1890年	1891年	1892〜96年	1897年
マゲラン	Balak	H.Helder & Co.	59,520	75,000	22,500	q)	39,282	34,500	閉鎖								
	Boro Boedoer=Magelang	E.Moormann & Co.	63,984	72,500	30,000	79,024	閉鎖、Balakに吸収										
	Grabak																
	Djoemoijo	Java-Tabakmij.	143,840	207,000	未操業	70,000	45,000	75,000	閉鎖								
	Djetak		100,192														
	Sawangan	't Hooft en Bousquet	95,520	66,500	140,000	50,000	35,150	100,000	閉鎖								
	Wonosari	W.C.L.Buijs	54,560	25,000	115,000	一時閉鎖	閉鎖、Djoemojoに吸収										
	Soetjen	C.S.Hein	50,592	40,000	未操業	4,500	操業せず	17,500	凶作	閉鎖							
	Kassak	E.Moormann en Co.	79,360	55,000	n.a.	一時閉鎖	閉鎖、Balakに吸収										
	Blambangan	Horrocks			n.a.	6,000	4,000	7,500	12,500	閉鎖							
	Djetak（81年〜）	C.E.A.White							7,500	閉鎖							
	Semeen（81年〜）	van den Broeck & Veeckens							5,000	閉鎖							
	Goelon（87年〜）	Firma John Pryee& Co.									30,000	150,000	n.a.	操業せず	操業せず	操業せず	閉鎖
トゥマングン	Temanggoeng	Loze	39,680	30,000	未操業	50,000	20,000	50,000	45,000	閉鎖							
	Djoemo		44,640	32,500	5,000												
	Para 舅	v.d.Broek & Veeckens	49,600	35,000	2,500	25,000	7,000	21,500	3,500	閉鎖							
	Tosari（75年〜）	E.Moormann en Co.	14,880	22,500	30,000	閉鎖											
	Ngrowoseneng（88年〜）	H.A.Salomonson										20,000	n.a.	21,000	閉鎖		

県	企業名	1910年	1911年	1912年	1913年	1914年	1915年	1916年	1917年	1918年	1919年	1920年
マゲラン (Salam 郡)	Progo	b 24,028 k 1,358	224バウ＊ b 89,187 k 10,076	256バウ＊ b 117,840 k 396,149	n.a.	276バウ＊ b 110,000 k 50,000	234バウ＊ b 115,492 k 28,454	286バウ＊ b 68,931 k 1,047,273	290バウ＊ b 151,008	154バウ＊ b 100,000 k 57,444	294バウ＊ b 162,175 k 375,977	155バウ＊ b 21,835 k 117,100
マゲラン (Salam 郡)	Cultuurmij. Moentilan			b 25,000	n.a.	69バウ＊ b 58,000 k 30,000	38バウ＊ b 27,400 k 3,000	140バウ＊ b 18,000 k 10,000	38バウ＊ b 3,800	15バウ＊ b k 186,000	125バウ＊ b 125,000 k 250,000	21バウ＊ b 11,000 c) k 106,000
マゲラン (Grabag 郡)	Grabag（1919年〜）										20バウ＊＊ k 11,068	n.a.
マゲラン (Magelang 郡)	Gondosari（1919年〜）										k 160,000	n.a.
マゲラン (Magelang 郡)	Soerabajasche Handels Cultuurmaatschappij（1919年〜）										k 144,890	n.a.
マゲラン (Magelang 郡)	Khe Kwat Le（1919年〜）										b 80,000 k 3,500	n.a.
マゲラン (Magelang 郡)	Lie Kok Liang（1919年〜）										b 30,650 k 243,000	n.a.

表３Ｂ　バゲレン理事州煙草企業生産量一覧（kg, 1875〜1920年）

県	企業名	経営者名	1875年	1876年	1877年	1878年	1879年	1880年	1881年	1882年
プルウォレジョ	Maron	E.Moormann & Co.	49,600	40,000	47,500	30,000	2,500	22,500	45,000	閉鎖
カランアニュル	Ketek	Handelsvereeniging “Rotterdam”	24,800	不明	未操業	20,000	操業せず[a]	5,000	閉鎖	
クトアルジョ	N.H.M.	Factorij der N.H.M.	49,600	92,000	20,000	137,500	7,500	67,000	閉鎖	

表註：q）合計値だが３者は別々の企業、ｂはブラッド煙草、ｋはクロソック煙草を示す。* は住民からの借地上での企業自作面積　** は住民が契約、または自己責任で栽培する面積
c）他に緑葉を9,495kg 生産。

出所：K.V.1876:bijl.TT, K.V.1878:bijlVV, K.V.1879:bijl.XX, K.V.1880:bijl.YY, K.V.1881:bijl.YY, K.V.1882:bijl.DDD, K.V.1883:bijl.HHH, K.V.1884:bijl.CCC, K.V.1885:bijl.CCC, K.V.1886:bijl.ZZ, K.V.1887:bijl.AAA, K.V.1888:bijl.FFF, K.V.1889:bijl.AAA, K.V.1890:bijl.ZZ, K.V.1894:bijl.FFF, K.V.1895:bijl.EEE、K.V.1896:bijl.EEE, K.V.1899:bijl.WW, K.V.1900:bijl.VV, K.V.1901:bijl.UU, K.V.1902:bijl.RR, K.V.1903:bijl.PP, K.V.1904:bijl.QQ, K.V.1905:bijl.OO, K.V.1906:bijl.OO, K.V.1907:bijl.RR, K.V.1908:bijl.RR, K.V.1909:bijl.LL, K.V.1912:bijl.KK, K.V.1913:bijl.KK, K.V.1914:bijl.LL, K.V.1915:bijl.KK, K.V.1916:bijl.LL, K.V.1917:bijl.GG, K.V.1918:bijl.AA、K.V.1919:bijl.Z, K.V.1920:bijl.AA, K.V.1921:bijl.AA

表４　ジャワ・マドゥラ各理事州煙草農園数の推移（王侯領を除く）

年	1875	1876	1877	1878	1879	1880	1881	1882	1901	1905	1910	1915	1918	1920
プリアンゲル	7	6	8	7	2	2	1		1				5	3
チェリボン		1	1											
テガル		1	1											
プカロンガン	1	2	3	3	2	1	1							
スマラン	4	7	8	7	5	2	2	1	1				1	
レンバン	13	10	10	9	5	5	6	4						
スラバヤ	2	2	2	1	1	1	1	1						4
マドゥラ														
パスルアン	18	14	14	13	13	12	10	9	35	36	37	33	10	30
プロボリンゴ	23	25	23	22	25	23	24	25						
ブスキ	12	14	16	13	11	10	9	8	19	30	18	27	11	17
バニュワンギ	1	3	3	3	2	2	1							
バニュマス	12	13	12	12	10	11	8	7	5	4	4	3	0	4
バゲレン	3	3	3	3	3	3	1							
ケドゥー	12	12	11	11	7	7	6				1	2	2	2
マディウン	1	1	1											
クディリ	42	50	52	49	41	35	32	19	9					
合　計	151	164	168	153	127	114	102	74	70	70	60	65	29	60

出所：K.V.1876:bijl.TT, K.V.1878:bijlVV, K.V.1879:bijl.XX, K.V.1880:bijl.YY, K.V.1881:bijl.YY, K.V.1882:bijl.DDD, K.V.1883:bijl.HHH, K.V.1902:bijl.RR, K.V.1906:bijl.OO, K.V.1912:bijl.KK, K.V.1916:bijl.LL, K.V.1919:bijl.Z, K.V.1921:bijl.AA

表５　ケドゥー理事州における煙草収穫面積の推移（バウ）

年平均	1874～79年	1880～84年	1885～89年	1890～94年	1895～99年	1900～04年	1905～09年	1910～15年	1916～19年	1920～24年	1925～27年
面　積	11, 787	15, 336	18, 320	22, 783	23, 643	24, 330	30, 656	44, 025	32, 436	30, 952	35, 096

出所：1874～1915年は K.V.1875:bijl.KK など、K.V. 各年所収の数字から計算、1916年以降は Bagchus 1929所収の数字から計算

３．20世紀の復活

20世紀に入り、再び輸出向け栽培を行う農園が出てきたことの背景には、表２に示されるように1900年代前半に底を打った価格がそれ以降再び上昇に転じたことがあったと思われる。ケドゥーの場合、1909年にマゲラン県 Salam 郡 Djoemojo 村に Progo という名前の企業が設立されたのが再開のきっかけだった［K.V.1910:297］。ただ、それまでの空白期にも、「ケドゥーでは立地していない工場も煙草の買い上げに従事するが、その煙草のうち原住民市場向けでない部分はヨーロッパへも送られる」[K.V.1899:182]、「(煙草) 栽培はケドゥー理事州のウォノソボ県、トゥマングン県、マゲラン県で特に大きな意義がある。生産の一部はヨーロッパ市場に向けられる」［K.V.1908:246］とあるように、この地域の煙草の一部は葉煙草として生産されヨーロッパ市場向けに送られ続けており、ゼロからの再開ではなかった。

さて Progo 農園は表３に示されるように、住民からの借地によってかなりの規模の生産を展

開した。1912年には２番目の企業 Moentilan が設立され､やはり借地上で生産を行った。その後、第一次大戦末の船腹不足による輸出の困難が解消され戦後ブームが到来した19年になると、新たに５企業が開設され、この地域の煙草農園は７軒になった[9)]。

その後の動向については不明な点が多いが、1923年の報告書によると Moentilan 郡とその周辺では借地して煙草を生産していた企業２軒が数年前操業停止したという［Fruin 1923a:311］。翌24年には買い上げ企業（opkoopondernemingen：自作なしの企業）が７軒あると報告され［Verslag HNL 1925:181］、全企業が借地を止めたことがわかる。26年にはそうした企業が15軒に増え［Report CIA:137］、27年にも14軒あったが［Verslag HNL 1927:223］、28年には再び７軒に減った［Verslag HNL 1928:200］。また32年には11軒の買い上げ企業がブラッド61,760kg、クロソック1,656,216kg を買い上げており［MvO Midden-Java 1933:183］、38年には10軒、39年に11軒がクロソックをそれぞれ213トン、529トン買い上げている［栗林1941:54～55］。

このように、この地域は20世紀にも輸出向け煙草生産地として一定の地位を占めた。そのことは、1920年代におけるアムステルダム市場へのケドゥー・クロソック出荷量、インドネシア産煙草全部の出荷量に占めるその比率を示した表６からも窺える。この比率は決して大きくはないが、それでも1934年には「中ジャワでは、クロソックが栽培される大地域（groote gebieden）はケドゥーとバニュマスである」［I.V.1935:135～136］と評価されている。

表６　アムステルダム市場へのケドゥー・クロソック出荷量（包）

	1921年	1922年	1923年	1927年	1928年	1929年
出荷量	5,324	12,154	30,208	30,622	17,667	16,200
同比率	1.55%	3.68%	6.13%	5.47%	2.94%	2.89%

出所：Verslag HNL 1924：108 ～ 109, 1930:222

ただ、ケドゥー煙草はジャワ産の輸出向け煙草の主力にはなり得なかった。それは表７に示される価格からも明らかなように、この地域で生産される葉煙草の質が必ずしもよくはなかったからだ。ケドゥー煙草は高級品のブラッドではクディリ産、レンバン産、マラン産、プリアンゲル産よりは高い評価を受けたが、スマトラ・デリー産、王侯領煙草、ブスキ、バニュマス産よりはかなり劣っていた。またクロソックではクディリ産、レンバン産、マラン産よりは高値が付いたが、ブスキ産、ルマジャン産、バニュマス産、スマラン産などには及ばなかった。

その大きな理由の１つは、「ケドゥーの煙草栽培はトゥマングン県、ウォノソボ県、マゲラン県に関する限り、特別な意味がある。……薫り豊かで力強い種類は、刻まれて原住民市場へ向けられる。それより劣る種類は、トゥマングンとアンバラワの葉巻工場のためにブラッド煙草として商われ、クロソックはヨーロッパへ船積みされる。」［K.V.1910:205 ～ 207］、「（Moentilan 郡とその周辺では）住民は彼らの煙草の一部を（ヨーロッパ市場向け）クロソックとして販売する

表７　インドネシア産煙草のアムステルダム市場価格（ギルダー /500kg）

産地・種別	1914年収穫	1913年収穫	1912年収穫	平　　均
王侯領煙草	40	31	38.25	36.42
ブスキ・ブラッド	50.25	38.75	40.5	43.17
ブスキ・クロソック	33	21.25	23.75	26.00
クディリ・ブラッド	23	14	15	17.33
クディリ・クロソック	16.25	10	11.75	12.67
レンバン・ブラッド	28.5		12.25	
レンバン・クロソック	15.5	10	11.75	12.42
ルマジャン・ブラッド	29.75	22.5	24.5	25.58
ルマジャン・クロソック	24.5	17.25	18	19.92
マラン・ブラッド	23	16.25	18	19.08
マラン・クロソック	18.25	10	12.25	13.50
ケドゥー・ブラッド	35	20.75	20.5	25.42
ケドゥー・クロソック	21.25	11	12	14.75
バニュマス・ブラッド	36.5	36.25	31.75	34.83
バニュマス・クロソック	22.5	15	17.75	18.42
スマラン・ブラッド	29	22	23	24.67
スマラン・クロソック	20.75	16.5	11.75	16.33
プリアンゲル・ブラッド			12.25	
プリアンゲル・クロソック		10.5	14.25	
デリー・ブラッド	93	127	136	118.67

出所：K.V.1915:216～217；1916:216～217

が、それはトゥマングン、ウォノソボ、バトゥールで行われているのと同じように、価値の最も低い最下層葉に限られる。ここ数年はこのクロソックに対する需要はほとんどなかったが、本年は若干増加した。しかし、このためになされたことはペペアンや（よその場合には）ガランガンの場合と比較すれば重要ではない[10]。原住民バクルは仲介者としてクロソックを買い上げる。収入が苦労にあわないという理由で、クロソックはしばしば捨てられる。」［Fruin 1923a:311］と述べられるように[11]、住民が栽培する煙草の最良部分は内地市場向けに加工され、近隣で葉巻製造原料として使われたり[12] 輸出に回されたりするのは劣等品であったからだ。

しかも20年代には、ケドゥー・クロソックの質の低下が進んだ。Vink［1926/27:499～500］によると、それは「数年前までは輸出商業で極めて評判が高く、売れ行きは順調だった」が、ここ数年は「混ぜ物をして質を落とすことは日常茶飯事となり、輸出商業はケドゥー煙草を買うことにますます躊躇する」ようになった。政庁は対策として Moentilan に煙草市場を開設し、そこへ煙草を搬入する住民に、十分な維持管理がされ輸出のための基準を満たす煙草だけしか扱わないこと、ヨーロッパ人輸出業者、大規模購入者（afnemers）はこの市場を通してのみ買うことになるだろうという点を周知した。その結果、住民が実際に持ち込んだ煙草はかなりよく世話を

されたものだったが、なお不純物が多く含まれ、輸出業者はそのまま購入することができなかったという。同様の市場は Magelang、Grabak、Salaman でも開設されることになった。

こうして先に見たようにクロソック生産はその後も30年代末まで続いたが、結局この地域の煙草の主力になることはなかった。「クロソックの1924年相場は高かったが、あまり悪くないケルフ煙草との価格差は非常に大きく、農民は栽培でケルフに適した葉を可能な限り見付けようとした」［Tabak 1925:89〜90］とあるように、農民は価格の点で有利なケルフ生産に力を注いだのである。クロソック価格は表８に示されるように、ケルフの下級品にも及ばなかった[12)]。

表８　ケドゥー煙草の１ピコル当たり価格（ギルダー）

	クロソック	ケルフ		
		３級品 ampadan	２級品 tengahan	１級品 tjilinkrik
1930年11月	3.0	4.25	25.0	100.0
1931年11月	2.5	7.5	37.5	65.0
1935年100kg 当たり	0.75〜7	5〜100		

出所：MvO Wonosobo 1931:bijlage,　I.V.1936:69〜70

Ⅲ．ケドゥーに於ける民間輸出向け煙草生産の特質

ジャワで輸出向け煙草企業が原料煙草を確保する方法は、一般に企業が栽培用地を借地しそこで住民を組織して栽培させるものと、企業は全く栽培に関与せず、住民が自由に栽培した煙草を買い上げるものに大別される。ケドゥーの場合には、当初は買い上げから始まったが次第に借地方式に移行し、そして再び買い上げ方式へと変わった。以下では、それぞれの特徴を述べたい。

１．煙草の種類について

輸出向けに主に栽培されたのは強制栽培制度以来のマニラ煙草だったが、他の煙草も対象になる場合があった。旧ケドゥー地域では1870年代初め、マニラ煙草が品薄な時や倉庫に余裕がある場合、良質なジャワ煙草を買い上げてヨーロッパ市場向けに加工した［K.V.1871:160 〜 161；1872:150］。特に Sawangan 企業は70年にジャワ煙草375ピクルを加工し［K.V.1871:160 〜 161］、71年にはそこに立地する企業が買い上げたジャワ煙草600ピコルのうち480ピコルが同企業によるものだった［K.V.1872:150］。72年にはジャワ煙草1,600ピコルが買い上げられた［K.V.1873:204］。

この他にも、各種在来種煙草の栽培が試行された。1870年にパレンバン産のラナウ煙草を種子から育てることが試みられたが天候不順で凶作となり［K.V.1871:161］、71年にはブリタル煙草で同じことが試みられたが、やはり失敗した［K.V.1872:150］。72年にはルマジャン煙草の導入が成功せず［K.V.1873:204］、75年にはデリー種、ボンドウォソ種の栽培試験が失敗している

［K.V.1876 :189］。また20世紀に入ってからも、Progo 企業は Patik Radja 企業から取り寄せたデリー種とジュンブル種を掛け合わせた種を蒔いたが、豪雨のため大半が凶作になった［K.V.1910: 223］。

このように旧ケドゥー地域での新品種導入は全て失敗におわり、1877年の報告に「ケドゥーではマニラ種が他種より好まれ続けている」［K.V.1877:204］といわれ、1923年には「数年前、この地方では２軒のヨーロッパ人企業が操業しており、借地してそこにマニラ煙草を栽培させていた。」［Fruin 1923a：311］と述べられるように、マニラ種が一貫して中心を占めた。

他方、旧バゲレン地域でも1877年にはマニラ煙草だけが栽培されており［K.V.1878:192］、やはりこれが中心だったようだ。ただ1881年には劣化したマニラ煙草以外に企業のためにカナリ煙草、ジュンブル煙草、デリー煙草も栽培されており［K.V.1882:188〜189］、様々な品種が試みられ、旧ケドゥーよりは良い結果が出たようだ。

２．初期の原料煙草確保法＝葉煙草の買い上げ

ケドゥーの煙草企業の初期の煙草葉確保の方法については、管見の限り K.V.1861の記述が最も詳細である。既に見たように、この年にはマゲラン県 Poerbolinggo 郡とトゥマングン県 Djetis 郡に、1 軒ずつ企業があった。前者の栽培面積は不明だが「栽培は口頭の協定にもとづき、前年11月に供与される前貸し金によりなされる。苗は企業が無料で提供する。小屋での供出時に、質に応じて１本当たり２、１、1.5セントが払われる。自由労働者確保は容易である。女性・子供は葉選のみに使用され、供出束数に応じて20 〜 50セントが払われる。男子は常雇労働者に使用されるだけで、月６ギルダーの給料と住居が無料で提供される。」と述べられる。他方、後者は35バウの栽培面積を持つが「この農園でも、土地耕作、植付け、作物管理、小屋での供出は、苗の無料交付により口頭協定でなされる。普通、前貸しを４〜５回供与する。先ず12月（栽培者確保のため）、次に５月か６月（植付けのため）、３回目は作物維持管理のため、最終回（４〜５回目）は収穫と小屋への輸送費のため。煙草の吊し、束ね、発酵、選別、圧縮作業は給料を払われるマンドール、クーリーが行い、葉選はたいてい女性が２束当たり１セントで行う。男子は繁忙期にも１日10名ほどで、日当は25セント。労働者確保に困難はない。スマランへの輸送は、300アムステルダム・ポンド当たり3.42ギルダーの契約で行われる。」［K.V.1861:bijl.AA］とある。

このように、(a) 農民との栽培契約は口頭で行われる、(b) 栽培者農民に前貸し金を供与する、(c) 苗は企業が無料で提供する、(d) 買い上げは企業の倉庫で行われ、質や量に応じて１本ずつ支払われる、(e) 葉選作業は女性や子供の仕事で、１日の稼ぎは20〜25セントである、(f) マンドールなど月給制の男子常雇労働者が少数いる、(g) 労働者の確保は容易である、などの特徴がある。

それではこのような方式は、それ以降に変わったのか、それとも変わらなかったのだろうか。

(a) はそれ以降の報告には62年を除き言及がないが、契約書を交わしたという記述も見られないので、おそらくそのまま続けられたと考えられる。(b) については、1865年の報告に「栽培者の前貸し受け取りは任意である。この前貸しは要求された苗の量にしたがって計算され、普通は煙草推定供出量の価値の1/3である」[K.V.1865:bijl.Z] と、その具体的な中味が示される。その後も、栽培者（planter）は苗を引く際、一定額の前貸しを得る [K.V.1869:116]、Wonosari を除く全企業で畑にある作物に対し前貸しが供与されている [K.V.1874:184] とあるように、具体的な形態は不明だが少なくとも73年まではほぼ全企業で続けられてきた。(c) については1864年までは明確な報告があるが、それ以降はよくわからない。ただ1872年には「栽培者自身が苗床を作る方式が、1872年にはますます増加」[K.V.1873:204] したといわれ、苗の提供が減っていった可能性が高いが、理由は不詳である。

(d) の買い上げ・支払い方法は、69年までは変わらなかったようだ。この年には「買い上げは１本当たり１セント、1.5セント、２セントで行われるが、2.5セントになることもある。Djetak、Djoemoijo、Sroemboong は総計で200万本を買い上げた。」[K.V.1870:114] とある。しかし、70年には「小屋で供出する場合、栽培者はこの最後に挙げた企業（Sawangan）ではマニラ煙草1000本当たり9.07ギルダーを受取り、ジャワ煙草１バウには平均81.12ギルダーが払われる。これ以外の企業の場合には、前者の価格は８～11.50ギルダー、後者は83.2～130ギルダーである。」[K.V. 1871:160～161] とあり、支払いがマニラ煙草の場合には1000本単位に変わり、ジャワ煙草の場合には１バウが計算の基準になっている。そしてこれ以降、1000本単位が基本になったようで、73年には「1000本につき、質に応じ20、15、10、５ギルダーが支払われ」[K.V.1874:184]、77年には「購入価格は茎1000本単位で計算され」、質に応じて10 ～ 30ギルダー払われた [K.V.1878:192]。また小屋以外での買い上げも行われるようになった。78年には「生産物は畑での買い上げや、後に煙草で清算する前貸し供与によって企業家の手に渡る」[K.V.1879:100] と報告される。いずれにせよ、支払いが本単位で行われていたことは、収穫が茎毎に行われており、この結果、上層の葉と下層の葉の成熟度がまちまちなので無駄になる葉が多かったことを示している。ブスキなどではそれゆえ、次第に葉毎に摘むことに変わっていったのであるが、ここではまだその段階には至っていなかったのである[13)]。

(e)、(f) については66年報告まで記載があるが、それ以降は不詳である。他方、(g) については1862年 [K.V.1862:bijl.Z]、63年 [K.V.1863:bijl.Y]、66年 [K.V.1866:bijl.CC]、69年 [K.V.1870:114]、71年 [K.V.1872:150] にも報告されており、労働者確保は一貫して容易だったようだ。

３．借地・企業栽培方式への移行

以上のような買い上げ方式は、1870年代に入ると徐々に企業による借地＝栽培組織化へと変化し始めた。73年の状況について、K.V. は「彼らの権利を確実なものにするために、企業家は栽

培用地を以下の条件で借り入れる。すなわち受け取った前貸しを煙草の供出で返済しない場合には、その土地は１年もしくはそれ以上にわたって企業家の支配下に置かれる。この方法以外に、企業家が借り入れた土地には、煙草が収穫の半分を提供するという条件で住民によって栽培される。」［K.V.1874:184］と指摘する。ここから見ると、企業が提供した前貸しに見合った煙草が供出されなかったことがあり、企業側は土地支配を強化して煙草の確保を目指したと考えられる。また75年には「Boro-Boedoer、Djoemo と Temanggoeng のみが住民に供出されるべき作物に対する前貸しを供与した。Sawangan、Baluk、Soetjen は、住民からバウ当たり25〜30ギルダーで借地する。」［K.V.1875:185］と報告され[14]、12企業中で前貸しを実施したのが３企業だけだったことがわかる。

同時に、企業は栽培自体に次第に口を出すようにもなった。当初は買い上げ方式だから当然ではあるが、企業側は栽培に対する監督を行うことはなく［K.V.1863:bijl.Y］、その状態は1865年［K.V. 1865:bijl.Z］、69年（「作物管理を企業家が行うことはない」［K.V.1870:114］）、77年（「住民は作物を全く自分自身の危険負担で栽培する」［K.V.1878:192］）にも報告される。しかし、その結果、供出される煙草は往々にして企業側の要求する基準を満たさなかった。1870年には「生産物の質は概して改善の余地が非常に大きい」［K.V.1871:161］、79年には企業が買い上げる煙草の「質は大いに改善の余地がある」［K.V.1880:176］と報告される。栽培管理はこの解決法であり、「ケドゥーでは、企業家はますます借地上で自らの手段で煙草を栽培する方向へ向かいつつあり、より優れた種類を獲得するために概して以前よりも多くの苦労と出費をいとわなくなった」［K.V.1881:178〜179］のだった。こうした方式は82年の全企業閉鎖でいったん途切れるが、87年に開設された Goelon 煙草企業も１バウ当たり20ギルダーで水田を借地し、収穫年毎に生産の半分は支払いなしに、残り半分は（質に応じて）1000本当たり３〜８ギルダーで企業家に供出しなければならないという条件を付け［K.V.1889:215；1890:201］、それを継承した。

また20世紀初頭に登場した２企業も、表３に示されるようにこの方式を踏襲した。Progo 農園は Salam、Moentilan 郡で住民と契約して灌漑水田を借地し、雨季稲収穫後に土地貸出者に企業が育てた苗（デリー種とジュンブル種を掛け合わせたもの）を無料で提供して栽培をさせ、支配人が指示して収穫させた葉を煙草小屋に供出させた。1909年、1910年は土地貸出者側の契約遵守状況が悪く、栽培管理には改善の余地が大きく収量は悪かったが、1911年には改善されたという［K.V.1910:220〜223；1911:217；1912:188］。表示のように、この年には同農園の栽培が本格化する。12年に開設された２番目の企業ともに、作物管理は「企業支配人の指示にもとづいて」［K.V.1913:173］行われた。借地料は3〜12ヶ月につきバウ当たり25ギルダーあるいは50ギルダーだった。また煙草の供出は緑葉の状態で行い、支払額は葉の長さが18ラインランド・ダイム（Rijnl.duim）以上の場合には１本が15枚の葉からなる煙草1,000本当たり7.5ギルダー、12〜15ラインランド・ダイムの場合には５ギルダーだった［K.V.1914:163〜164］。

４．買い上げ方式への再移行

しかし、20年代に入ると再び買い上げ方式へ移行した。Landbouwatlas［1926:staat VI］によれば、1922年のケドゥー農園煙草の生産はマゲラン県で190,057kg、ウォノソボ県では171,250kg、合計361,307kg（ジャワ・マドゥラ総生産の1.3%）に達するが、これらは全て買い上げによる。30年代に入っても、企業借地は31年9ha、32年3ha（何れも水田）のみ［I.V.1934:tabel 188］と少なく、1933年の中ジャワ省知事覚書ではケドゥーの煙草企業は全て買い上げ方式を採るものが11軒あるといい［MvO Midden-Java 1933 Nov:183］、38年、39年のデータによるとケドゥーの農園煙草生産213トン、529トンは全て買い上げによるものである［栗林1941:54〜55］。

これらの買い上げにはヨーロッパ人商社も、華人商人を代理人としたり、自前の買い付け組織を現地に置いたりして参入した。この場合には葉の乾燥は農民の手で行われ、既にデサ内で売れていない場合には、筵（tikar）で包んでパッサールへ搬入された［Tabak 1925:89］。

おわりに

以上、ケドゥーにおけるヨーロッパ市場向け煙草の生産をみてきた。その生産の本格的開始は強制栽培制度廃止後の民間企業による自由栽培によるものであり、1870年代前半にアムステルダム市場の高値を背景に発展した。しかしその発展は長続きせず、市場価格の下落によってジャワの輸出向け生産がそれに最も適した特定の地域に収束していくにつれて、この地域の煙草生産は専ら本来行われてきた内地市場向けに特化していった。その後、輸出向け生産は20世紀に入って再開され、ケドゥーは中ジャワにおける中心地としての地位を占めるが、ケドゥー煙草はジャワ産輸出向け煙草の主力にはなり得なかった。それは、ケドゥーでは輸出向け葉煙草が内地市場向け煙草の付随物として生産されてきたからだった。豊かな収入をもたらす後者の生産の前に、輸出向け生産は遂にこの地域の煙草生産の主力にはなり得なかったのである。

註

1）小論でいうケドゥー地方とは1900〜28年にケドゥー理事州に属した地域を指す。これらの地域はしばしば行政区画が変更され、カランアニャル、ウォノソボ、プルウォレジョ、クトアルジョ、クブメン各県（afdeeling）は1899年以前はバゲレン理事州に属していたが、本稿ではこれらもケドゥーとして扱うことにする。

2）植民地期のインドネシア産原料煙草は一般に葉煙草と刻み煙草（ケルフ）に大別される。葉煙草は収穫後、乾燥と熟成の過程を経た後に葉のままでボール状に纏められて、ヨーロッパ市場へ出荷された。一般に品質の差によりブラッドとクロソックに分けられる。他方、後者は収穫した煙草葉を青葉のままで刻み、その後に加工を行うもので、基本的には内地市場向けだった。なお、18世紀までヨーロッパの需要は、アメリカ産煙草の輸送とヨーロッパ自らの栽培に

よって満たされていた［Tabak 1925:4］。

3）これ以降に強制栽培の中で使用された煙草品種は理事州によって異なるが、たいていはいわゆるハバナ種（kooltabak）だった。ただジャパラ理事州ではマニラ種、及び現地種をも栽培した。これらは基本的にヨーロッパ市場向けだが、ジャパラでは1企業が700ピコルの煙草を内地市場向け、及び大半をシガー製造に利用したといわれる［K.V.1853:166］。

4）Deventer［1866:566］によると、試行面積は16ヨンク（＝64バウ）だった。

5）乾燥小屋に搬入された煙草の加工は一般に自由な賃金労働者を雇用して行われ、平均日当額は男子が15〜20ダイテン（duiten）、女性、子供は10〜15ダイテンだった［K.V.1853:166］。これらは出来高払いが普通であり、また労働者の不足は生じなかった［K.V.1861:151］。

6）Fasseur［1975:120］によれば煙草栽培は1840〜49年95,560ギルダー、1850〜54年4,461ギルダー、1855〜59年60,518ギルダーと常に大きな赤字を出していた。

7）ジャワ全体で見れば、このようないわゆる「自由栽培」は既に1840年代末には実施されていた。K.V［1850:78］によると「人々はその他に、煙草栽培を可能な限り自由栽培として行わせようとし、そのために若干の企業家達の手で既に小規模な試みがなされている。彼等はその目的のために住民に煙草種子を提供し、それは企業家の介入なしに彼等の手で播かれ育てられる。他方、彼等は1本当たり品質に応じて1/2〜2ダイテンで生産物を供出する」とある。

8）住民は価格推移を睨んで、クロソックに加工するかケルフに加工するかを柔軟に選択したと考えられる。同様の記事は1920年代の報告［K.V.1925:166〜168］にもあり、ケドゥーではクロソックが値上がり傾向にあるときには、原住民煙草の大部分はクロソックとして輸出されるが、クロソックの価格が大きく下がる時にはケルフへの加工が増えることが指摘されている。

9）19年新設企業主のうち、Khe Kwat Ie と Lie Kok Liang はマゲラン市に大規模シガー・シガレット工場を持ち［MvO Kedoe 1927］、ここで作られた煙草はその原料に利用された可能性が高い。

10）ペペアン、ガランガンは内地市場向け刻み煙草の種類を示し、前者は天日乾燥、後者は直火乾燥により加工される。

11）1930年代についても、Heijden［1935:565］が同様のことを指摘している。

12）ケドゥーはジャワ内の葉巻・紙巻き煙草生産の中心地だった。既に1890年には Temanggoeng と Parakan に14人の葉巻・紙巻き煙草製造業者が住むと報告され［K.V.1892:bijl.C］、20世紀初めの福祉減退調査ではジャワ内の製造中心地の1つとしてあげられ［Hasselman 1914:137］、原料は現地産煙草を用いるが、この時期には華人の他に1人のヨーロッパ人、さらに何人かのジャワ人もその製造に従事していた［Directeur OEN 1904:117］。これらの産業がケドゥーで盛んだったことは、1915年末の段階で、「5名以上の労働者を持つ煙草製造業数・労働者数」が24企業・893人とジャワの理事州中で最多であったこと［Gegevens Nijverheid

1916:bijlage］からも明らかである。なお、この地域の葉巻・紙巻き製造の詳細についてはTabak［1925:188〜191］を参照。

13）これについてはさし当たり、植村［1983:70］を参照。

14）こうした借地方式への移行はブスキでも見られたが、そこでは専ら企業間の競争激化に勝ち抜くためにそれが行われた。詳しくは植村［1983:61 〜 64］を参照。

引用文献一覧

Bagchus, C. W., 1929：*Maandgemiddelen en Bouwgrondoccupanties per district van de negen belangrijk Inlandsche Landbouwgewassen op Java en Madoera in de jaren 1920 tot en met 1925*, Weltevreden

Bleeker, P., 1850：“Fragmenten eener Reis over Java”, *Tijdschrift voor Neerlandsch-Indië*, 1850-1

Blink 1912：“Tabak, tabakscultuur, tabakshandel en tabaksindustrie der aarde”, *Tijdschrift voor Economische en Sociale Geografie*, vol.3

C.E.I. vol.1：*Changing Economy in Indonesia, vol.1, Indonesia's Export Crops 1816-1940*, 1975, Amsterdam

C.E.I. vol.14：*Changing Economy in Indonesia, vol.*14, *The Cultivation System, Java 1834-1880*, 1993, Amsterdam

C.E.I. vol.15：*Changing Economy in Indonesia, vol.15, Prices*（*non-rice*）*1814-1940*, 1994, Amsterdam

Crawfurd, J., 1820：*History of the Indian Archipelago*, vol.1〜3, Edinburgh

Deventer, S. van, 1866：*Bijdragen tot de Kennis van het Landelijk Stelsel op Java*, dl.2, Zalt-Bommel

Directeur OEN 1904：*Rapport van den Directeur van Onderwijs, Eeredienst en Nijverheid betreffende de Maatregelen in het Belang van de Inlandsche Nijverheid op Java en Madoera*, I, Batavia

Elson, R. E., 1994：*Village Java under the Cultivation System 1830〜1870*, Sydney

Fasseur, C., 1975：*Kultuurstelsel en Koloniale Baten, De Nederlandse Exploitatie van Java 1840-1860*, Leiden

Fruin, Th., 1923a：“Een en ander over de tabakscultuur voor de Inlandsche markt in de reg. Bandjarnegara, Wonosobo, Temanggoeng en Magelang”, *Blaadje voor het Volkscrediet-wezen*, 11-9

Gegevens Nijverheid 1916：*Gegevens betreffende de Nijverheid in Nederlandsch-Indie*, I

(Publicaties van de Afdeeling Nijverheid en Handel, 1916, no.6), Batavia

Hasselman 1914：*Algemeen Overzicht van de Uitkomsten van het Welvaart=Onderzoek, gehouden op Java en Madoera in 1904–1905*, 's-Gravenhage

Heijden, R. W. van der, 1935:：“Rapport betreffende de Tabakscultuur in het Regentschap Wonosobo en de Credietvoorziening der Tabaksplanters”, *Volkscredietwezen*, 1935

Hoevel, W. R. van, 1849：*Reis over Java, Madura en Bali in het Midden van 1847*, 1ste deel, Amsterdam

I. V.：*Indisch Verslag* 1931～1942

K. V.：*Koloniaal Verslag* 1848～1930

栗林源十郎 1941：『蘭領東印度に於ける煙草事業調査書』、協同煙草株式会社

Landbouwatlas 1926：*Landbouwatlas van Java en Madoera*, Deel II, Weltevreden

MvO：Memorie van Overgave

Raffles, T.S., 1817：*The History of Java*, vol.1, London

Report CIA：*Report on Commerce, Industry and Agriculture in the Netherlands East-Indies during 1926*, Weltevreden

Tabak 1925：*Tabak. Tabakscultuur en Tabaksproducten van Nederlandsch-Indië*, Weltevreden

Tabakskultuur 1857：“De tabakskultuur en de vrije arbeid”, *Tijdschrift voor Neerlandsch-Indië*,1857–I

植村泰夫 1983：「煙草栽培とブスキ農村」、『南方文化』第10輯

Verslag HNL：*Verslag omtrent Handel, Nijverheid en Landbouw van Nederlandsch-Indië gedurende..*, Weltevreden

Vink, G. J., 1926/27：“De Kedoe-krosok”, *Landbouw* 1926/27

付記　本稿は平成16～19年度科学研究費補助金（基盤研究（c）(2)）「植民地後期ジャワ住民煙草産業史研究」による研究成果の一部である。

A Note on the Cultivation of Tobacco for the European Market in Kedu in the Late Colonial Era

Yasuo UEMURA

In this paper the production of leaf tobacco for the European market in the residency Kedu (Central Java), developed since the second half of the 19th century, is explored. Kedu had been one of the centers of tobacco production from of old, which, however, was all oriented to the domestic market and the production for the European market began by the introduction of the Cultivation System in 1830. This system, however, could not operate well in the cultivation of tobacco and was abolished here as early as in 1842. After that leaf tobacco production for the European market was taken upon by the European private enterprises which started operation in 1860 by buying up leaf tobacco from the peasants. Since then the production continued to increase until the middle of the 1870s due to the high market price of leaf tobacco in Europe, but after that it rapidly decreased and all of the enterprises disappeared from Kedu by the beginning of the 1890s. In the first decade of the 20th century the production for the European market revived here and occupied a certain position in the leaf tobacco export to Europe from Java, but Kedu could not become the major center for its production. The reason was that the tobacco was cultivated here consistently for the domestic market which gave the higher income to the people, and so the production for the European market was done only incidentally.